

第五章 光る源氏の物語 末摘花の物語と和歌論

[第一段 歳末の衣配り]

年の暮に、御しつらひのこと(この姫の御部屋の新年飾りや)、人びとの装束など(女房たちの晴れ着の用意などを)、やむごとなき御列に思しおきてたる(他の高貴な夫人方たちに並ぶようにと殿は考え置きなさいましたが)、「かかりとも(斯くありとは言っても)、田舎びたることや(京風を心得ずに田舎びてしまうだろう)」と、山賤の方にあなづり推し量りきこえたまひて(姫を山奥育ちの口なので任せられないと殿は推し量り申しなさい)

調じたるも(出来合いのものを)、たてまつりたまふついでに(姫にお贈りなさる時になって)、織物どもの(織物工房たちが)、我も我もと(我こそはと挙って)、手を尽くして織りつつ持て参れる細長(丹念に織り上げて持って参った肩掛晴れ着や)、小桂の(羽織晴れ着の)、色々さまざまなるを御覧ずるに(色々さまざまな物を御覧になって)、

「いと多かりけるものどもかな(ずいぶん沢山あるものですね)。方々に(それぞれの御部屋の御方々に)、うらやみなくこそものすべかりけれ(羨みの無いように分けてやると良いでしょう)」

と、上に聞こえたまへば(夫人にお話し申しなさると)、御匣殿に仕うまつれるも(夫人は裁縫所で仕立てさせたものも)、こなたにせさせたまへるも(手元で仕立てさせたものも)、皆取う出させたまへり(一覽すべく皆取り出させなさいました)。

かかる筋はた(夫人はこうした衣服装束に関しても)、いとすぐれて(とても優れた感性をお持ちで)、世になき色あひ(新しい色合わせや)、匂ひを染めつけたまへば(発色で染め付けさせなされるので)、ありがたしと思ひきこえたまふ(殿も感心申しなさいいらっしゃいます)。

ここかしこの(此処彼処の)擣殿(うちどの、艶出しの布打ち工房)より参らせたる(から取り寄せた)擣物ども(うちものども、艶出し布類を)御覧じ比べて(殿は見比べなさい)、「*濃き赤きなど(上級者用の紫布や下級者用の赤布などと)、さまざまを選らせたまひつつ(さまざまに仕分けさせなさい)は、御衣櫃(みぞびつ、大箱や)、衣笥(ころもばこ、小箱)どもに入れさせたまうて(などに入れさせなされるので)、おとなびたる上臈どもさぶらひて(手馴れた上級女房たちが)、「これは、かれは」と取り具しつつ入る(と取り分けて揃えます)。上も見たまひて(夫人も立会いなさい)、「*濃き色」は<濃い紫色>とある。「赤衣(あかぎぬ)」は<召使などが着る赤い衣>とある。この対比文は私の誇張だが、全くのデッチアゲでも無い。

「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを(優劣の違いが無い出来栄えのようですが)、着たまはむ人の御容貌に思ひよそへつつたてまつれたまへかし(お召しになる人のお顔立ちに似合う物を考えて選んで差し上げなさいませ)。着たる物のさまに似ぬは(お召し物が似合わないのは)、ひがひがしくもありかし(見た目が悪いですから)」

とのたまへば、大臣うち笑ひて、

「つれなくて(然り気無く)、人の御容貌推し量らむの御心なめりな(人の御器量の程を推し量る心算のようですね)。さては(それでは貴方自身は)、いづれをとか思す(どの服が似合うとお思いですか)」

と聞こえたまへば(と申しなさると)、

「それも鏡にては(自分の事は鏡を見ても)、いかでか(良く分かりません)」

と(と夫人は)、さすが恥ぢらひておはす(そのまま恥らっていらっしやいます)。

*紅梅のいと紋浮きたる(濃い桃色のくっきり紋様の浮き出た織物と)*葡萄染の御小桂(薄紫の上掛けの)、今様色のいとすぐれたるとは(流行色のとても素晴らしい織物とは)、かの御料(ごれう、この夫人用にと殿がお選びなさいます)。*「こうばい」は色名で<濃い桃色>とある。「紅梅」のままでも赤紫の色合いを思うが、「かさね」の色目という説明もあって、何れ実体を掴み切れないので平易に言い換えた。*「えびぞめ」は<薄い紫、ブドウの実の色>とある。こちらも「かさね」の色目という説明もある。織物で言えば、「紅梅」が縦糸紫に横糸赤、「葡萄染」が縦糸赤に横糸紫、ともあるが、何れ実体は掴めない。「こうちぎ」は通常礼装の上掛け着、とのこと。

*桜の細長に(薄桃色の肩掛け晴れ着に)、つややかなる*搔練取り添へては(光沢のある練り絹の赤い内着を添えては)、姫君の御料なり(明石姫君用でした)。*「さくら」も色名で多くの説明があるが、ざっと<薄桃色>で良いだろう。「ほそなが」は前身頃・後身頃・袖身頃はあるものの、脇や袖下を縫い合わせていない飾り着で、言ってみれば<肩掛け晴れ着>かと。「こうちぎ」は脇と袖下を縫い合わせた衣服らしい。*「かいねり」は絹を灰汁(アク)を加えたアルカリ水で煮て柔らかくした生地で、特に色を示していなければ赤い衣を言うらしい。冬から春に用いる、とあるから少なからず防寒用の内着なのだろう。

浅縹の海賦の織物(水色地に海辺模様の織物で)、織りざまなまめきたれど(丹念な仕事ながら)、匂ひやかならぬに(落ち着いた色合いの物に)、いと濃き搔練具して(濃い赤の内着を添えて)、夏の御方に(花散里用に)。「あさはなだ」は<明るい水色>。Webの色見本は助かる。「かいふ、かいぶ」は織物の模様の一つとあり、<波・海藻・貝・磯馴松(そなれまつ)などを取り合わせ、海浜の景色を表したもの>と古語辞典に説明されている。

曇りなく*赤きに(鮮やかな明るい黄色の内着に)、山吹の*花の細長は(山吹色の派手な肩掛け晴れ着という取り合わせは)、かの西の対にたてまつれたまふを(かの西の対の姫にと殿がお選びなさるのを)、*上は見ぬやうにて思しあはす(夫人は特には何も気付かないような素振りで次のようにお考え合わしなさいます)。*「あかき」は<赤い色>ではなく<明るい色>らしい。それも、此処では<黄色>だ。それは「山吹の花の細長」に規定される。「細長」は上掛けであり、「やまぶき」は赤味のある黄色だから茶系統だが、それを上に着る「かさね」の色合わせは、下に黄色の内着と決まっている、からだそうだ。この辺の「かさねの色見本」については、「彩りの歳時記」というサイトの「春のかさね」のページが分かり易く有難い。特に同サイトの「裏山吹」ページにある<山吹色は、王朝時代の代表的な黄色の色名で「古今集」「新古今集」では梅・桜・藤に続いて春の終わりを飾る花として登場します。>という記事は、その順序が此処の語りと同じなので、梅・桜・藤・山吹とかさねの色見本を見て行けば、幾らかの臨場感も感じられる。*「花の衣」は<華やかな衣服、派手な服

>とある。 *「上は見ぬやうにて」の文は非常に思わせぶりの言い回しだ。で、この作者にしては珍しいほどのはっきりとした思わせぶりに、却って少し戸惑うくらいだ。

「*内の大臣の(姫の実父の内大臣が)、はなやかに、あなきよげとは見えながら(華やかで、ああ美しいとは見えながら)、なまめかしく見えたる方のまじらぬに似たるなめり(深い情緒があるようには見受けられないのにこの姫も似ているらしい)」と、*げに推し量らるるを(殿の以前の事情説明に符合するように姫を推し量られるのを)、色には出だしたまはねど(夫人は分かったような表情はお出しにならないが)、殿見やりたまへるに(殿は夫人を見やりなさって)、*ただならず(何かを考えているらしいとはお気づき為さいます)。 *「うちのおとど」とあるからには、紫君には西の対が藤原大臣の実子である事を殿が話していた、ということになる。語りでは「上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける。」としかなかったのも、何処まで光君が話したのかは全く分からなかったが、直接の世話を任せた花散里には詳しい事情を知らせていないようだったので、やはり紫の上は光君にとって別格の正夫人ということなのだろう。 *「げに」は納得や確認を示す副詞で、同様の筋の説明が他者から自分に以前にあったことを意味する。 *「ただならず」は殿が<何かあると察する>に違いない。上は「色には出だしたまはね」とあるのだから、大臣君に様子を窺われたからといって、上が「ただならず」何かをした、とは思えない。と、此処の文は女房語りの分かり難い言い回しはあるものの、論理は現代的で非常に分かり易く、最新の小説を読むようだ。

「いで(あ、いや)、この容貌のよそへは(この器量と衣装の比べ合いは)、人腹立ちぬべきことなり(人の恨みを買いかねない)。よきとても、物の色は限りあり(良い織物と言っても種類は少ない)、人の容貌は、おくれたるも(人の顔立ちは劣っていると言っても)、またなほ*底ひあるものを(それもまた然程の違いも無いのだから)」 *「そこひ」は<果て、極み、限度>とある。衣装の「色は限りあり」に対して、容貌の<幅も限度がある=優劣も大差ない>という言い方。だから「容貌の比へ」は意味がないと、殿は自分が盛り上げた晴れ着の選り分けを、自分がはしゃいでいた所為か、上の思索顔を物憂い表情と見て、遣り過ぎたかと反省して、自ら鎮静化を図るという場面ではあるらしい。が、同時にそれが次の文の洒落た前フリにもなっていると言う計算高い筆運び。

とて(と言って殿は)、かの*末摘花の御料に(あの象鼻の末摘花用に)、*柳の織物の(若々しい柳色の織物に)、よしある唐草を乱れ織れるも(上品な唐草模様が散らし織られているものを宛がう事になさったものの)、いとなまめきたれば(それがとても優美な服だったので)、人知れずほほ笑まれたまふ(前言がまるで嫌味ようになってしまっただけで思わず苦笑なさいます)。 *末摘花は久々の話題だ。六条院には移って来ていないらしい。以前は二条院東院の北の対の一角を宛がわれていたが、かの女主人たる花散里は六条院に来ているので、東院の暮らしぶりは変わったはずだが、その辺は一切言及が無いので脱稿が有るかも知れない。 *「やなぎ」の「かさね」は、例の「彩りの歳時記」サイトの「柳がさね」のページに、萌黄色(もえぎいろ、黄緑)の衣着に白の上着を重ね着るような色見本があって、はつらつとした色合いだが、そこに唐草模様が透かし織りされていればさぞ上品だろう。

梅の折枝(梅の枝先に)、蝶、鳥、飛びちがひ(蝶や鳥が飛び違う絵柄の)、唐めいたる白き小桂に(唐織めいた白地の羽織晴れ着に)、*濃きがつややかなる重ねて(濃い紫の光沢のある衣着を加えて)、*明石の御方に(明石の御方用に)。思ひやり気高きを(その晴れ着姿を想像すると気高く感じられたので)、*上はめざましと見たまふ(夫人は若君の実母だから殿が気を遣って大事に為さるのかと意識なさいます)。 *「濃き」は<濃い紫色>。「つややか」は<艶がある>だが、練り絹と見て内

着とした。「重ぬ」はく加える。 *「明石の御方」が末摘花の後に来る序列構造に驚く。明石姫君は光君の子なので紫君の次だと言うのに、その実母の明石御方はやはり受領の娘ということらしい。花散里が三位なのは中将君の親代わりでもあるからだろうが、王家筋の義理の叔母という血筋も重々しい。四位が西の対というのも、娘として世話するということと、藤原大臣の実子という血筋からも軽くは遇しにくい。しかし、五位の末摘花は意外だった。さすがに王家血筋である。同列の一夫人の中では筆頭の家柄、ということになるらしい。で、六位が受領の家柄の明石御方ということらしいが、若君の実母というだけでなく、光君の中央復帰を実質で支えた、光君の実母の従姉弟という血筋の明石入道の娘でもあるのであり、光君の地位保全への貢献度の高さから言っても、この序列は私には分かり難い。だから逆に、そういう身分社会だったのかと驚かされる。 *「上はめざまし」は、以前にも紫君が明石君を「めざまし」く思う記事があって、その時も<一目置く>という意味に私は理解した。自分が育てている若君の実母なのだから<意識する>のは当然だと思うからだ。だが、訳文や注釈では「めざまし」を<目障りに思う>という意味に取っている。それを否定する材料はないが、かといって<目障り>を納得できる描写も特には無かったように思う。やはり、今のところは<意識する>で行く。

*空蟬の尼君に、青鈍(あをにび、青ねず色の喪服)の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて(とても趣き深いものを見つけなさって)、*御料にある(御自分用に用意されてあった)*梶子の御衣(くちなしのおんぞ、肌色の御召し物で)、聴し色なる(ゆるしいろなる、禁色ではない地味な色合いだったものを)添へたまひて(添えなさって)、同じ日(両方を同じ元旦の晴れ着として)着たまふべき御消息聞こえ*めぐらしたまふ(お召しになるようにとお手紙でわざわざお申し付けなさいます)。*げに(そうした御自分の勢力下にある空蟬の姿が今ではすっかり)、似ついたる見むの御心なりけり(似付いているところを見たいという殿の魂胆なのでした)。 *「うつせみ」は末摘花より以上に久々の話題だ。末摘花については二条東院に住んでいた事が「蓬生」巻に明示されていたが、空蟬は「関屋」巻に於いて夫常陸介に死に別れて出家したとの記事はあったものの、その時期やその後の事は明示されていなかった。それらの話の発端は、光君が28歳の秋に中央復帰した翌年の夏から秋に掛けての時期のことではあったようだが、二条東院の落成はその二年後の光君31歳の夏くらいであり、末摘花についてはその間は修繕した旧宅に住んでいたとの概略はあったものの、空蟬については何も語られていなかった。だということに、二条東院の落成時を語る「松風」巻の冒頭にも、「北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなる。」とあるだけで、「隔て隔てしつらはせたまへる」中身の説明は無かったので、末摘花は「蓬生」巻の記事を頼りにその北の対の一角に住んだらしいと類推出来たものの、空蟬については「かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと」の中に含まれているのかもしれない、と私はゆかしがっていただけである。「松風」巻の注釈に『新大系』は「空蟬、末摘花、五節などをさす。末摘花については蓬生巻に既出」と注す。>とあっても、頼るべき記事は無かったことを改めて思い出す。それが、此処に唐突に「空蟬」と記される。非常に不満だが、空蟬は末摘花と共に二条東院に住んでいるらしい、と考えるのが精一杯だ。 *「御料にある」は分かり難い。与謝野晶子訳文に「源氏の服に仕立てられてあった」とされていたので、「ごれう」が<御自分用>の意味らしいと知る。また更に「梶子の御衣」とあり、「おんぞ」という言い方が<殿の御召し物>を示しているようにも思える。更に「梶子」の色合いを<肌色>と言い換えれば、かつて夜這った時にセミの抜け殻のように、とは正に空蟬だが、この女が脱ぎ捨てた「小桂を御衣の下に引き入れて、大殿籠もれり」と「空蟬」巻に描写された光君17歳の夏の思い出がよみがえる。この直後に光君は六条御息所に王朝風のイヤラシサたっぷりの大人の性愛を教えられて、すっかり大人になった心算で居た矢先の秋八月に夕顔の突然死に立ち会うことになったのである。そして彼此の女遊びが、葵上では満たされない藤壺への激情に駆られた、背伸びせずにはいられない光君の狂おしさだった、というのが幾つかあるこの物語の底辺

の設定の一つのようだ。*「梔子」はクチナシの実を染料にした染物で、織物の他にも食品にも用いられる、とのこと。色はその実と同じ赤味がかった黄色、とのこと。色見本で見ると、強い黄色ではあるらしいが、色合いは鮮やかというよりは地味でくすんでいる。枇杷の実に近い色。ただ、「梔子色」となるとクチナシの染物にベニバナを重ね染めして、より赤味を増した上品な鮮やかさのある皇太子用の禁色で、「聴し色」と断っているのはクチナシだけで染めた地味な色合いだったということのようだ。*「めぐらす」を<他の夫人方にも一斉に廻らす>と訳文は取っているようだが、空蟬の話題の最中に<他の夫人方>をいきなり登場させる解釈は不可思議だ。辞書にも「めぐらす」は<計略を練る>とあるのだから、此处は‘そのように’光君が<企画した>と素直に読む他は無い。その‘そのように’とは、未亡人の空蟬が尼僧の出家姿で元旦に新しい喪服に身を包むわけだが、その下には、わざわざ贈った「御料にある梔子の御衣」を私ないし私との思い出と思って、肌近くに忍ばせていて下さい、という光君の執念深いイヤラシサによる工夫である。*「げに」は完全征服を意味する。「アンダー・マイ・サム」を男の傲慢としか思えない向きには分かり難いのかも知れないが、女に被征服欲があるのは疑うこと自体が疑わしい。強いて言えば、男役が表で女役が裏、とかいう言い方も出来るが、生態としてヒトが個体でも集団でも性的存在なのは客観物性認識だ。女が、というかヒトの女性格である生活認識を、男に、というか男性格である勢力認識としての頼れる者の庇護下で、安定を図るという気持ちを可愛いものとして受け止めることが、人間社会に於いて他人を大事にすると言うことであり、そう考え付かない世界観は誤りであり、そう思えない人生は悲しい。勿論、男が女の意向を汲んだ上で統一見解を代表して責任を持つ、という内実を伴っていなければ、外形上に過ぎない一時的制圧は、表裏一体という本質に反するので早晩瓦解する。が、それも含めて全ては流動性の中で一形態を示すものではあり、此处で示される性的な充足感をイヤラシイ雅な風情と味わなければ、この文を読んだ甲斐が無い。

[第二段 末摘花の返歌]

皆(夫人たちは皆)、御返りどもただならず(御礼状にも熱が入って、)。御使の禄(御使者へ与える褒美の品にも)、心々なるに(それぞれ心を砕いていたようだが)、末摘(すゑつむ、末摘花は)、*東の院におはすれば(二条東院にいらっしゃる)、*今すこしさし離れ(女房が少し離れた御使いになるからと六条院の夫人たちとは少し違った心付を)、艶なるべきを(気を利かせても良さそうなものを)、*うるはしくものしたまふ人にて(格式ばった人なので)、あるべきことは違へたまはず(型通りと違うことは為さらず)、山吹の桂の(下げ渡し物として山吹色の内着の)、袖口いたくすすけたるを(袖口が着古して煤けたものを)、*うつほにてうち掛けたまへり(実のある菓子や調度を土産に持たせることも無しに御遣いの女房の肩に掛け与え為さったのです)。*「ひんがしのゐん」とは<二条東院>だ。やはり末摘花は居残っていたのだ。*「今すこしさし離れ」は<女房の少し遠い御使い>ということと<六条院の妻たちとは少し変わった形で>の掛詞、かと思う。*「うるはし」は<愛しい。親しい>の他に<端正だ、整然としている、完全で隙がない>とある。*「うつほ」は<空っぽ>。注には<下に衣を重ねないで、使者に与えたの意。>とある。型通りの「御使の禄」がどういうものなのか良く分からないが、「松風」巻の第三章第三段で桂院に勅使が来訪した際にも衣服反物を土産に持たせていた。とあって、「山吹の桂」が相応しい土産かどうか、まして着古しては頂けないのかも知れない。しかし、末摘花は古式一点張りの人だから、女房にお古を下げ渡すこと、それも何かの褒美であれば親しく肩に掛けて遣る、というのは正式な形ではあったのかも知れない。で、問題は「空洞」である。「山吹の桂」だけで<下に衣を重ねない>のは今風ではないのかも知れないが、問題は恐らく形式ではなく、というか形式でしかない事で、殿から妻たちへの御使であれば古参の顔見知りだろうに、以前から話題の品か実用品などの気持ちの通う遣り取りが、末摘花からは無かったことなのだろう。で、思わず御使の女房は殿に愚痴った、に違いない。

御文には(御礼状は)、*いとかうばしき陸奥紙の(とても香ばしい陸奥紙の)、少し年経(すこしとしへ、少し古くなって)、厚きが黄ばみたるに(ふやけて黄ばんだものに)、 *この描写は「末摘花」巻の第一章第九段の今を遡ること17年前の光君18歳の年の「歳末に姫君から和歌と衣箱が届けられる」話で、「陸奥紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深くしめたまへり」とあったのにそっくりだ。変わっていない。この宮姫も変わっていないが、取り巻き女房たちも変わっていない、ということだ。二条東院に住んでいれば、少なからず最新文化に触れては、感化もされそうなものだが、それでも変わらないというのには、いろんな意味で驚かされる。因みに、気の利いた乳母子の侍従は、大貳の北の方になっていた末摘花の叔母に誘われて筑紫下向して大貳方の女房に収まったらしい。「蓬生」巻では、大貳方が任期終了で上京して、末摘花が二条東院で源氏大臣の世話を受けていることを知って驚いたことが記されていた。それも四年位前のことだろうから、筑紫の三条が羨んだ大貳の北の方は後任者なのだろうか。しかし少貳だった乳母一家は筑紫暮らしが長かったから、もしかするとその大貳の北の方は末摘花の叔母だったのかも知れない。

「いでや(まあこの)、賜へるは(頂き物は)、なかなかこそ(大変なもので)。

着てみれば 恨みられけり 唐衣 返しやりてむ 袖を濡らして」(和歌 22-13)

またご立派な唐衣、御礼の言葉も御座いません」(意識 22-13)

*この歌には注釈や解説が無いので丸っきしの当て頭っ砲だ。殿からは「末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れる」とあったのだから、末摘が「からころも」を詠み込んだ礼状は成立している。「着る」「裏身」「返す」「袖」は「唐衣」の縁語。「着てみれば」は<来て見れば→別れが辛い>ので、「恨みられけり」は<悲しくなると涙が出る>から、「唐衣返しやりてむ袖を濡らして」は<見送りで別れの言葉を返す時は唐衣で涙を拭きます>、というのが歌の筋のようだ。また、「うらみ」は「占見」で<心を知る>だから、「着てみれば占見られけり唐衣」が<着てみれば御厚情が分かる唐衣で>で、「返しやりてむ袖を濡らして」が<感涙に咽ぶほど有難く御礼申し上げます>、という立派な御礼状となっている。私には、この歌は儀礼上の挨拶文としては及第点以上の出来栄に見える。逆に言えば、良く出来た挨拶文でしかないのかも知れないが、この御歳暮への礼状であってみれば、卒の無さは大事かと思う。では何も問題が無いかというと、気に成る事は在る。例の17年前の「末摘花」巻第一章第九段にあった、あの時は末摘からの歳暮に添えられた「唐衣君が心のつらければ、袂(たもと)はかくぞ濡ち(そぼち)つつのみ」(和歌 6-10)という歌に、この歌筋も変わっていない、ということだ。当歌の方が技巧的には凝っているように私には思えるが、歌の本質であろう感性ということに於いては驚くべき変化の無さ、ではあるのかも知れない。

御手の筋(御筆跡は)、ことに*奥よりにたり(格別に古風でした)。 *「奥寄る」は「あうよる」と読むらしく、<奥へ寄る、奥まる>を原義として<古風である、年を取る>の意味にも使われる、と古語辞典にある。

いといたくほほ笑みたまひて(殿はこの礼状を事の他に面白がって)、とみにもうち置きたまはねば(直ぐにはお置きにならなかった)、上、何ごとならむと見おこせたまへり(夫人は何が書かれているのかと覗き込みなさいました)。

御使にかづけたる物を(末摘が御使に下げ渡した心付を)、いと侘しくかたはらいたしと思して(殿はひどく貧相で不都合にお思いになって)、御けしき悪しければ(御立場が無さそうにしていらしたので)、すべりまかでぬ(御使たちはそっと退出しました)。いみじく(そして女房たちの曹

司で盛んに)、おのおのはささめき笑ひけり(口々に末摘の悪口を言い立てては笑っていたのです)。かやうにわりなう古めかしう(このように無闇に古めかしく)、かたはらいたきところのつきたまへる*さかしらに(見つとも無い事が付きまとう末摘の余計な習性を)、もてわづらひぬべう思す(殿も持て余し気味にお思いのような、)。*恥づかしきまみなり(困った目つきでした)。*「さかしら」は<利口ぶること、余計なこと、差し出口>とある。本人は良いと思って遣る、世間には都合の悪いこと。 *敬語のない場合は聞か内心。

[第三段 源氏の和歌論]

「*古代の歌詠みは(昔風の歌の読み方は)、『唐衣(美しさや愛しさを表して「きる・たつ・かへす」などの衣類縁語の表意と複意で歌を作る「からころも」という言葉を使って)』、『袂濡るる(例えば「たもとぬるる」のように<悲しくて涙を流す>といった)』*かことこそ(事寄せ言にする手法からは)離れねな(離れませんね)。まろも、その列(つら、同類)ぞかし。さらに一筋にまつはれて(それにしてもこの宮姫は、ますます同じ詠み筋に凝り固まって)、今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ(新しい言葉に動じないとは)、*ねたきことは、はたあれ(ご立派といえご立派なものです)。 *「こたい」と読みにあるから「古体」でもいいのかも知れない。どちらも意味は<昔風>とある。 *「かこと」は「託言」で<恨み言>ともあるが、本来は「託ち言」で<事寄せ言>と古語辞典にある。 *「ねたし」は「妬し」であり<憎らしい、癩に触る、恨みに思う>などだが、原義は<相手の立派さが羨ましい>と古語辞典にある。此处では、あえてその原義で使っているようだ。尤も今でも、「妬ましい」はその含みで使う語だ。「はたあれ」は<一方では有るでしょう>で<～とも言えるでしょう>くらいか。注には<『集成』「ご立派と言えご立派なものです」と訳す。皮肉。>とある。従う。

*人の中なることを(友人とのことを)、をりふし(季節ごとの式典の)、御前などのわざとある歌詠みのなかにては(御前歌会などで詠む場合には)、『*円居(名残惜しい「まどゐ」という言葉が)』 離れぬ三文字ぞかし(いつも使われる古風な三文字というわけです)。 *「ひとのなか」は<衆人の中、世間の中>でもあるだろうが、歌を詠むのだから、その<人付き合い>の相手は<友人>なのだろう。 *「まどゐ」自体は<車座、宴会>だが、其処に在るだろう<友情や和み>は類推しやすい。因みに古語辞典には参照歌として、古今集卷十七雑歌上 864 番の「おもふどち 円居せる夜は 唐錦 立たまく惜しき ものにぞありける」が示されていて、「韓錦裁ち難し」に掛けて<円居の席を立ち難い>という筋に、「韓衣」と「韓錦」との繋がりも因縁めく。

昔の懸想のをかしき挑みには(昔の恋歌で味わいを出そうとするには)、『あだ人(浮気者を言う「あだびと」)』といふ五文字を(という言葉を使った五文字を)、*やすめどころにうち置きて(第三句に置くことで)、言の葉の続きたよりある心地すべかめり(後句の言葉の続きで話が落ち着くと考えるようです) *「休め所」は<休憩所>とあり、又はと、此处の「やすめどころにうち置きて」の文章を参照に出して<和歌の第三句>と古語辞典にある。が、此处の文章の「休め所」が何故<和歌の第三句>を示すのかという和歌論上の説明は無い。で、自分で考える。漢詩の中でも最も短い四行詩の絶句の構成は、一般に起句・承句・転句・結句と理解される。この起承転結の話の運びが事物を面白く認識できるので、歌や物語の構成要素として更に一般化されて支持されている、のだろう。私もこの基本要素は分かり易い。で、和歌は5・7・5・7・7の五句であり、この源氏の和歌論によれば<起・承・休・転・結>の構成になるということのようだ。発句は、目立つ事であろうと目立たない事であろうと、語り手の言い出した事に聞き手は注目するのだから、「喚起」に違いない。二句は、論旨を整えるために「喚起」した事象の経緯や状態を説明するのだから「継承」に違いない。三句は、そ

の「継承」が場の共通認識として収まる間としての「休憩」だというのは、確かに一定の説得力はある。ただ詠み手が三句を、「承」のまま引っ張ろうと、「転」を急ごうと、「転の序」で含みを持たせようと、更には別の「起」を持ち出そうと、「結」にしてしまおうと、全ては詠み手次第ではある。であれば、「休憩」だと規定してみても良い訳だ。四句が「転回」で、五句が「結論」であっても、それが必然とは言えないが、否定も出来ない。こんな所か。

など笑ひたまふ。

「よろづの草子(多くの和文や)、歌枕(歌に詠む名所を)、よく案内知り見尽くして(詳しく知り尽くして)、そのうちの言葉を取り出づるに(そこに在った言葉を使って)、詠みつきたる筋こそ(詠んだ歌筋は)、強うは変はらざるべけれ(元の文や歌と大して変わらないものでしょう)。

常陸の親王の書き置きたまへりける(父親王の故常陸宮が書き写してお置きになった)*紙屋紙の草子(かうやがみのさうし、官製紙の和書)をこそ、見よとて*おこせたりしか(読むようにと末摘が遣して来たことがありました)。 *「紙屋紙」は此処では「かうやがみ」と読みにあるが「かんやがみ」に同じとある。「かんやがみ」は<平安時代、紙屋院で製した上質の紙。>と大辞泉にあり、平安末期になると「薄墨紙」のことを言ったともある。「うすずみがみ」は<反古(ほご)を漉(す)き直した紙。墨の色が抜けていないため、薄墨色を呈する。平安末期、官営の製紙所紙屋院(かみやいん)で漉き直し、物忌みのときの奏文などに用いたが、鎌倉中期からは宣旨(せんじ)などを書くのに用いた。水雲紙(すいうんし)。宿紙(しゆくし)。紙屋紙(かみやがみ)。すきかえし。>と大辞泉にある。 *「おこす」は<遣す、贈る>とのこと。

和歌の*髓脳いと所狭う(和歌の解説がびっしりと書かれていて)、*病去るべきところ多かりしかば(間違えやすい注意点なども多く指摘されていて)、もとよりおくれたる方の(それらは私よりもより苦手としていた方面で)、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば(ますます堅苦しく思われたものですから)、むつかしくて返してき(面倒なので返してしまいました)。よく案内知りたまへる人の口つきにては(そうした和歌の理論に精通した末摘の歌詠みなのだから)、*目馴れてこそあれ(こうした立派な歌な分けですよ) *「ずいなう」は大辞泉に<重要な部分。奥義(おうぎ)。心髄。>とあり、特定の語用として<歌学で、和歌の法則や奥義などを述べた書物。>ともある。奥義では丸で手掛かりが無いので<解説、解釈>と考えてみた。 *「やまひ」は<病気、気懸かり、短所、欠点>とあるが、特定の語用として<詩歌・文章などで嫌うこと>ともある。 *「めなる」は<物事に馴れる>で「手馴る」よりは<熟知している>という意味合いかと思う。

とて、をかしく思いたるさまぞ(殿が姫宮を笑いものに為さっていらっしゃるというのも)、*いとほしきや(先が思い遣られる所でした)。 *「いとほし」が<可哀相、気の毒>または<かわいい、いじらしい>という意味になるのは限定的なものだ、と思う。「少女」巻でもノートしたが、「いとほし」を<厭ひ+がまし>だとすると、「厭ふ(いとふ)」は<嫌悪する>が原義だから<嫌悪が予期されて懸念する>という語感であり、他人の<困難を気遣う>は更にその派生ということになる。此処はより原義に近い<困難が思い遣られる>という意味かと思うが、対象が末摘なのか、殿の有様なのか、全体の行く末なのか、が分かり難い。

上、いとまめやかにて(夫人は殿の戯言を真に受けたように)、

「などで、返したまひけむ(どうして返してしまわれたのですか)。書きとどめて、姫君にも見せたてまつりたまふべかりけるものを(若君にもお見せなさるべきでしたのに)。ここにも、ものなかなりしも(私の所蔵本にも、そうした歌論が無いでもありませんでしたが)、虫みな損なひてければ(虫食いに遭ってしまいましたので)。見ぬ人はた(読んでいない私などは)、心ことにこそは遠かりけれ(歌の詠み方で特段の素養から遠のくままです)」

とのたまふ(と軽口を仰います)。

「姫君の御学問に*いと用なからむ(姫君の御学問には用立ちません)。すべて女は(およそ女というものは)、立てて好めることまうけてしみぬるは(取り立てて好きなことに没頭して物事を極めるのは)、さまよからぬことなり(望ましい姿ではありません)。何ごともいと*つきなからむは口惜しからむ(何事にも丸で似つかわない事があっては無作法です)。ただ*心の筋を漂はしからずもてしづめおきて(ただ信条をしっかりと持って落ち着いて)、なだらかならむのみなむ(何でも卒なくこなせるのが)、*めやすかるべかりける(好ましい姿なのです)」 *「いと用なからむ」は文法に則って‘直訳’すれば<少しも役立つものではないでしょう>のように見えるが、いわゆる‘直訳’なるものは文法上の一解釈に過ぎず、論理的な意味読みを試みるのに参考になるが、その一解釈が文意の場合も有れば、別の解釈が文意の場合もある。そして此处では未来の推量ではなく、未来を見越した価値観の表明である。 *「付き無し」は<似合わない>とあり、「いとつきなし」は<丸で似合わない>。「くちをし」は<不本意だ、残念だ、情けない>と<感心しない←無作法>。 *「すぢ」は<考え方>。「心の筋」は<信条>。 *「めやすかるべかりける」は「さまなり」の重複語用を避けた省略文、だろう。「めやすかるべし」なら直接の意見だろうが、これは若君まで引き合いに出して尤もらしい議論の体裁を取ってはいるが、根は冗談なので堅い表現を避けるべく客体視した婉曲表現にした上に、省略語法とした、のだろう。

などのたまひて(などと殿は仰って)、返しは思しもかけねば(返歌をお考えにもなって居なさそうなので)、

「*返しやりてむ(お返ししたい)、とあめるに(と姫宮の御歌に在るようですのに)、これよりおし返したまはざらむも(殿から御返歌為さらないでは)、ひがひがしからむ(不都合となりましよう)」 *「返しやりてむ」の字面は<返してしまおう>だが、文意は必ず返したことになるように強く思っ<お返ししたい>であり、歌で詠んだ意味は<御礼申し上げます>だった。それを<お返ししたい>の意味で取ったら、出し手は<私はお返ししたいのですが、貴方のご意向は如何ですか>と問い掛けたことになって、受け手は「おし返したまはざらむもひがひがしからむ(お返事なさらなきやダメでしょ)」ということになるので、紫君も末摘の器量を承知の上で言葉遊びをしている、ということになる。となると「ひがひがし」に込めた紫君の思いも少し気になる。「ひがひがし」は<ひねくれている、曲がっている>だから、紫君は専ら光君に対して<無礼>とも<不都合>とも言っているように見えていた。で、それは正しいのだろう。ただ、「ひがもの」は<偏屈者>であり、その形容はむしろ末摘花に向けられて然るべきにも思える。で、それも正しそうだ。紫君に故意に末摘を貶める動機も必要もないだろうが、かといって不要な同情を示すよりは、僻者を変わり者と認識して普通に笑い者にする方が、紫君が少し汚れた分だけ末摘の傷が浅いし、光君も汚れ過ぎずに済む。あえてロウアー・バランスを探って事の収集を図ると言う三方一両損の手法による、この紫君の腹の据わった対応によって、「いとほし」は幾分改善された。

と(と夫人は殿の遊びに付き合っ、そそのかしきこえたまふ(お勧め申しなさいませ)。情け捨てぬ御心にて(すると殿は御見限りなさらない思い遣りで)、書きたまふ(末摘に返書をお書きになります)。いと心やすげなり(それも、いとも気軽そうに)。

「返さむと 言ふにつけても 片敷の 夜の衣を 思ひこそやれ (和歌 22-14)

「もっとはっきり、会いたくて身をよじるとでも言いなさい (意識 22-14)

*「片敷き」は、添い寝で互いに腕枕をする、その片方の袖だけを頭に敷く、ということで「独り寝」を意味する、と古語辞典にある。「夜の衣」はそのまま「寝巻き」とのこと。だから、この歌の筋は「貴方が礼状で「返したい」と言うのを聞くにつけても、貴方の独り寝の寂しい寝巻き姿が思い遣られます」ということで、何か皮肉っぽい感じの伝わる言い回しだが、歌意は意味不明だ。と、此処で注釈の助け舟の登場である。注には「源氏の返歌。「返し」「衣」の語句を用いて返す。「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る」(古今集恋二、五五四、小野小町)を踏まえる。」とある。「むばたま」は「ぬばたま」に同じとあり、「ぬばたま」は「ヒオウギ」という草の実。丸くて黒い。」と古語辞典にある。画像は Web で有難く参照した。「ぬばたまの」は実の黒さから「黒・夜・髪・夢・月」などに掛かる枕詞で「うばたまの」「むばたまの」ともいう、とある。「夜の衣を返す」は「夜の衣を裏返しに着て寝ると恋しい人に夢で会える、という伝説から「夢でも会いたい」を意味する言い方」ということらしい。だから、末摘が「返したい」と言うのが「私に夢でも会いたい」と聞こえる、ということになるのだろう。つまり当歌は「貴方が礼状で「返したい」と言うのを聞くにつけても、私に夢でも会いたいと寝着を裏返しに着て寂しく独り寝をする貴方の姿が愛しく思い遣られます」という意味になる。この歌意自体には皮肉は無い。しかし、末摘は「返しやりてむ」を「返したい」の意味で言って来たのではなく、一意は「御礼申し上げます」の意味で言って来たのであり、礼状の「着てみれば占見られけり」を「来て見れば恨みられけり(会えば別れが辛いので)」に複意させて「涙ながらに別れの言葉を返す」と歌中劇で「会いたい」気持ちを滲ませる慎ましさだった。いや今更は、「うらみられけり」に「裏返しに着る夜の衣にしたい」と会いたさを訴えていたことも改めて分かって、却って私にはこの光君の指摘、とは作者の注記だが、ますます完成度が高い歌に思われる所だが、それらはあくまでも技巧表現という位置付けになるらしい。その末摘の姿勢に対しては、この歌は痛烈な批判である。なぜなら光君は、その末摘の格好付けが気に入らない。もっと素直に本音を言ってくれば可愛いのに、と思う。気持ちが通えば、象鼻だって気にしない、多分。だから、貴方もこういう風に本音で歌を詠みなさい、という皮肉では無く意見である。しかし末摘は象鼻の劣等感に苛まれている。本音なんて、とても言えないし、良く分からないし、実は信用していない。だから理屈を句ね回して格好を付けながら、慎ましく気持ちを伝えたい。それが本心だし、真心を込めた礼状なんだから、その努力を認めてほしい。しかし光君は、こと恋愛に関しては真剣勝負で生きている。命懸けである。自分が文化を作っているのであり、文化を彩っているのでは無い。努力の前に気持ちをさらけ出せ、である。斯くして両者は傍目には表裏一体ではなく、影の分身として一生交わること無く併走する。とか、思いつくままノートする。

ことわりなりや(これが道理でしょうに、そうは思いませんか)」

とぞあめる(とのようにあったようです)。

(2010年11月14日、読了)